

本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等を行うことは、法律で認められた場合を除き禁じます。

「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論(4):

## 一実践編(準備号)一 英語に愛されないことは私たちの責任ではない

<http://eetimes.jp/ee/articles/1207/09/news001.html>

「英会話は度胸」なんて言葉が氾濫しておりますが、英語が度胸でしか成立しないものであるなら、一体、私たちは青春時代の膨大な時間を費やして、何を学ばされてきたのでしょうか。

2012年07月09日 08時00分 更新

[江端智一, EE Times Japan]

われわれエンジニアは、エンジニアである以上、どのような形であれ、いずれ国外に追い出される……。いかに立ち向かうか?→「[『英語に愛されないエンジニア』のための新行動論](#)」連載一覧

こんにちは。江端智一です。今回は「英語に愛されないエンジニア」である私たちが、海外で仕事を行うに際して、英語に愛されないエンジニアとなってしまった原因を明確にして、皆さんと一緒に英語に対するマインドセット、いえ、マインド「リセット」をしていきたいと思えます。

この連載を読んでいただいている多くの皆さんが「英語に愛されない」という自己認識に至っていることや、さまざまな状況で苦しんでいらっしゃることを、Twitterやメールで教えてもらいました。そして今や、皆さんの「実践編」への要望が非常に高まってきていることも知っております。

Twitterやメールだけでは足りず、ついに、私の後輩は「一体、いつから実践編が始まるんですか!」と私のデスクまで詰めかけてきましたし、この原稿をレビューしている私の嫁さんまでが「引っ張るにも限度がある」と文句を言うほどです。しかし私には、まだ一つやり残していることがあり、これだけは著者としてどうしても譲れない一線なのです。それは、「我々の無罪の立証」です。

英語に愛されない理由を「見える化」

---

本連載ではこれまで、「英語に愛されないエンジニア」は何をしても愛されない運命にあること(本連載の[第2回](#))、そして「海外に送られる」ことから逃げる方法が、全てつぶされていることを示しました(本連載[第3回](#))。

実践編の準備号として今回お伝えしたいメッセージは、「私達が『英語に愛されないエンジニア』となってしまったことは、私たちの責任ではない」ということです。英語に愛されないエンジニアであると自認されている方が、こんなにも日本に大量に存在するに至った原因を「見える化」したいと思います。



写真はイメージです

そして、次回からの実践編では、この責任の所在については「おりこみ済み」として、この連載では二度と「言い訳」として使えないようにします。つまり、今回の「マインドリセット」の目的は、私たちが、私たち自身に、英語に愛されないエンジニアとして海外で闘うための「最後の覚悟を迫る」ことにあります。

では、責任はどこに幾つあるのか。今回、私はこのテーマに対して、項目に漏れがないか十分にチェックしながら慎重に検討を続けました。もし、あなたが上司から、「どうしてお前は、英語ができないんだ!」などという理不尽なことを言われた時、あなたが、今回の連載の印刷を課長の顔の前に突き出し、「課長!これがその答えです!!」と返せるぐらいまで、筋の通った論理付けを試みたつもりです。

あなたは勉強を怠ってきたわけではありません。あなたの英語の能力が欠落しているわけでもありません。あなたは、本当に頑張ってきました。私はよく知っています。あなたを「英語に愛されないエンジニア」にしてしまったのは、あなたではなく、これから説明する「5つの要因」なのです。では、始めさせていただきます。

## 第1の要因 英語が日常で使われない「日本」という環境

そもそも「英語に愛されない」とは、どういう状態を意味するのでしょうか。私は「英語を使わない環境下では、英語能力を発揮しない」ということだと思っています。もっと簡単に言うと、母国語(日本語)の環境下で、他の言語を使用できるようになる「奇妙な能力」を発揮しない、普通の状態にあるということです。

人間は、環境の変化に動的に適応する能力が備わっていると言われていています。生存に関わる状況下に陥れば、別の能力を発揮することができます。「火事場のばか力」もその1つです。仮に、火星にしか通じない「火星語」の環境下で生きていかなければならぬなら、人間は火星語の取得も成し得る能力を発揮するものです。しかし、火星語の環境にいなければ、火星語を取得する必要はなく、逆にそのような無駄な能力は、生存を危うくします。

我々がエンジニアであり続ける理由は、「技術



という手段」を持たないと「食っていけない」という環境下にあるからです。比して、生存に直接関係がなく、1日24時間どこにいても英語が聞こえてこないような環境下であって「英語を使えるようになる能力」に長けているというのは——もちろん、それはエンジニアにとって避けて通れない運命であるにしても——なんか、とても薄気味悪い、もとい、特殊な能力のような気がするのです。



写真はイメージです

これを裏付ける事実としては、仕事や観光を終えて我々が成田空港の入国審査の列に並んでいる時に、英語学習に対する意欲に燃えていることが挙げられます。これは生存の本能が維持されているためであり、健全な状態です。それにも関わらず、2~3日で、うそのように英語への熱が冷めてしまうという事実もあります。生存に関係のない能力を減退させること。これまた、健全な状態だと言えるのです。

皆さん、今さらですが、もう一度よく考えてみませんか。「英語が使われない場所において、英語が使えないこと」って、そんなに変なことでしょうか。

## 第2の要因 日本国内において英語が必要な人間の比率が小さいこと

日本において英語を使う機会は絶無に近く(勉強やドキュメントは除く)、本連載の第3回にご説明した通り、海外に渡航し英語を必死で使わなければならない人口は、年間で就労人口全体のわずか「4%」程度の人口にすぎません(図1)。リピータを考えると、2%程度かもしれません。少なくとも現状のデータで見ると、我が国は、100人に2~4人程度しか、英語コミュニケーションを必要としている人がいません。このような状況下で、日本人の各個人が、その能力開発のモチベーションを発生させるのは無理、というか、無謀です。

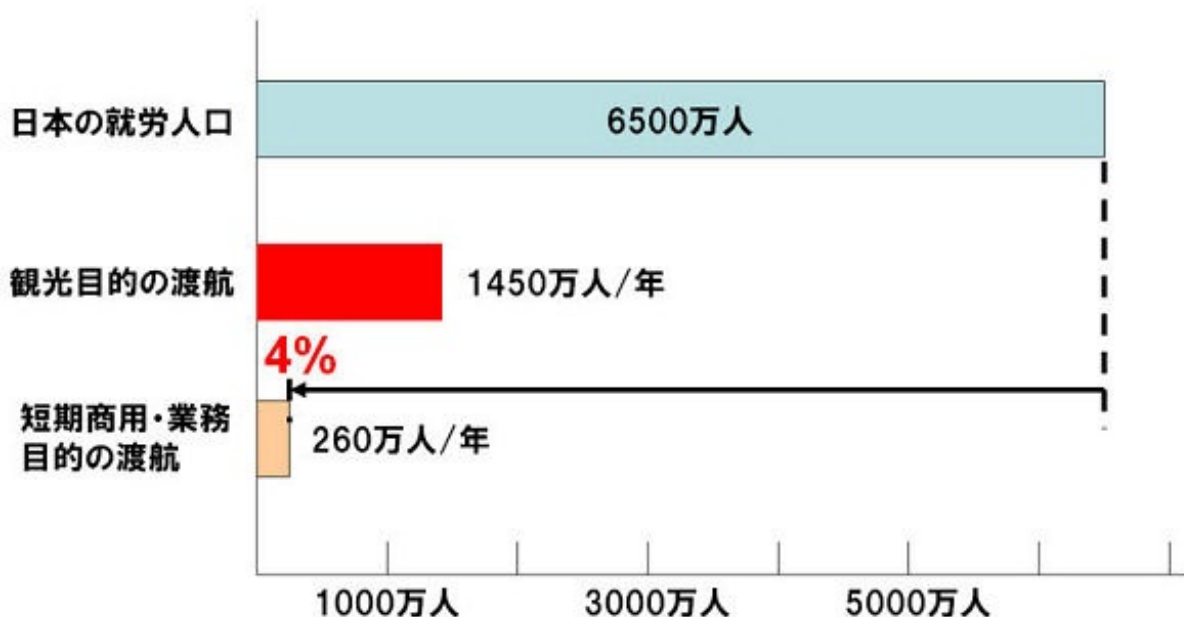


図1 日本の就労人口と短期海外出張者人数(年間)

私は、日本中に乱立している英会話学校が、どんなビジョンを持って生徒を集めているのか調べてみました。この連載を始めてから、私は英会話学校のパンフレットを集め、YouTubeで昔のテレビCMを見まくり、それぞれの英会話学校の設立趣意を読み取ろうとしました。しかし、全然分からなかったのです。書いていなかったからです。「英語が必要だ」という事実はあります。それはよく知っています。しかし、「日本国民の全て」に英語が必要かという、それは、かなりウソくさい。それはデータが示す事実から乖離(かいり)しています。

そもそも、勉強というものは、「それがいつ役に立つか分からない」という状況下において、劇的につまらないものです。誰だって一度は、「微分や積分が一体何の役に立つというのか」とか、「リトマス試験紙が何色になろうか知ったことか」と、数学や理科の教科書を放り出した経験はあると思います。そんな中、「英語」というのは、比較的意義を見出しやすい教科ではあるのですが、使う機会が見えないのであれば、これ以上ない「無駄な勉強」にまで落ちます。

「将来、絶対に必要になるよ」とおっしゃっていた中学、高校時代の先生の言葉と、私が調べた「4%」の数値の間で、私は今、混乱しているのです。

仮に、英語の必要性を「観光」に求めるのであれば、実に年間1450万人もの人が出国しています。毎年、日本人のおよそ10人に1人が海外に出国している計算です。観光が、国際コミュニケーション人材育成の第一歩であると考えれば、その目的は達成しているのかもしれませんが。

観光をきっかけに、海外にプライベートな友人ができれば、人生はより豊かになるでしょう。観光人口のたった1%(15万人)の方であっても、海外の友人ができれば、とても素晴らしいことです。民族の枠組みを超えて、お互いの考えや立場を理解できるようになれば、国家間の紛争も減っていくことでしょう。「国家百年の計」の観点から見れば、大変意義あることだと思います。

しかし、明日にでも「油の臭いのする工場のラインで、現地のエンジニアと大声で怒鳴りながら仕事をする場面(本連載の[第1回](#)参照)」で闘わなければならない我々エンジニアにとって、「百年の計」などというのんびりした話はどうでもよくて、明日のリアルな日々の方が、はるかに深刻です。



写真はイメージです

一人のエンジニアとして言わせていただければ、たかだか、数年に一度、1~2週間程度の「海外旅行」のために10年近くも英語を勉強させられてきたとすれば――私は絶対に怒る。

### 第3の要因 英語教育者の資質と英語教材の内容の問題

---

この連載を始めて、「英語に愛されている人」とは、すごい人なのではなく、「普通でない能力を有する特殊な人(以下、「特殊な人」と略します)」ではないか、と思うようになってきました。我



が国の英語教育をリードしている方々が英語に愛されている人と仮定すれば、我が国の英語教育は、「特殊な人」によって行われていることになります。ここで、いくつかの疑問が生じます。

特殊な人は、「英語に愛されない私たち」を理解できるのでしょうか。「片思いでは足りない」という事実(本連載の[第2回](#)参照)を認められるのでしょうか。そして、最大の疑問は「特殊な人が、特殊でない私たちを教育できるのでしょうか」ということです。日本における英語学習の環境は、果して適正なものであるのだろうか、私は常日ごろから疑問に思っております。

第一に、前述した通り、英語を教える側にある人たち、つまり、日本で英語教育をリードしている方々(先ほど私が「特殊な人」と述べた方々)のその「資質」に問題があるのではないかと考えています。第二に、英語の教科書やNHKのラジオやテレビのプログラムの内容は、適正ではないのではないかと疑っています。英語教育のリーダーの方々と英語の教材は、それらが相互に連携して、負のフィードバックループを形成しているように思えて仕方ないのです。

英語教育をリードされている皆さんは、英語に愛されている人です(英語が死ぬほど嫌いなのに英語教師になったという話を聞いたことがないので、この論証は省略します)。そして、そのような人は、原則として無条件に頭が良く、理解のスピードも恐ろしく速く、そして何より、英語を使うケースが絶無の我が国において、英語を自分のものにし得た「意欲の塊」の方々です。



写真はイメージです

そのような方が付き合う海外の方々も、「意欲の塊」たる知的エリートの方となるのは当然です。自然に、その生活、文化、思考形態は、世界的な知的エリートに通じるものとなります。そして、その内容が、「文部科学省認定の英語の教科書」や「NHKラジオ・テレビ英会話テキスト」に反映されるわけです。それらの教材で、勉強をする私たちは、このような高度な話題が展開されている英語に恐れおののき、躊躇(ちゅうちょ)するようになります。「外国に行ったら、こんな高度な知的で難しい会話を、英語でしなければならないのか」と。

しかし、この現状は、少なくとも私が過してきた海外生活の状況と一致しません。どの国でも、「平気で約束を破る」、「時間を守らない」、「最悪の品質の商品を渡してくる」といった人は普通にいましたし(日本人よりずっと多かったように思う)、考え方がアバウトで、その場しのぎで、空気を読めない人間も少なくなかったように思います。

例えば、米国の上級軍曹(シニア・サージェント)と話をする機会があったのですが、彼が「UFOは我々人類に警告を発しているのだ」と語った時、私は「日米安全保障条約の抜本的見直し」を政府に勧告すべきではないかと、真剣に考え込んだものです。

#### 第4の要因 「英語は度胸」という奇妙なキャッチフレーズ

---

さて、冒頭の「英語は度胸」の話に戻りますが、今、このフレーズをGoogleで検索したら、ヒッ

ト数は「約 92,200 件 (0.26 秒)」と出てきました。ところが、「英語は度胸」とブログに書いている人のほとんどが、外国に在住している商社マンや留学生、在留日本人です。そんな語学の環境に恵まれた人間が、「上から目線」で何を偉そうなことを言っていやがる、と、私は愉快ではありません。

例えば、「スキーの経験のない人を、無理やり山頂までリフトに乗せて、頂上で置き去りにする」という行為を、「何事も度胸だ」とか言いながら正当化するのは、こういう人たちなのだ…と、今、暗い部屋の中で、一人、ぶつぶつとつぶやいています

もちろん、このような人たちがGoogleの検索ヒット数である9万人以上もいるわけではないと思いますが、このような奇妙なキャッチフレーズが、英語の世界では支配的であることを示す証拠にはなっているでしょう。試しに、「数学は度胸」、「物理は度胸」、「国語は度胸」を検索してみたのですがヒット数はゼロでした。こんな言い回しが存在しているのは、「英語」だけです。

そもそも、「英語」が度胸でしか成立しないようなものであるなら、一体、私たちは、青春時代の膨大な時間を費やして、何を学ばされてきたのでしょうか。その落としどころが、「英語は度胸」では、泣くに泣けません。一体、文部科学省の皆さんは、どういうビジョンで我が国の英語教育を施策されてこられたのでしょうか。



写真はイメージです

英語ができないことが私の「頭の出来具合」の責任ならそれでも結構です。それならそれで、最初からあんなむちゃくちゃな英語カリキュラムを、私にだけは課さないでほしかった。どうせ「英語に愛されない」のであれば、その英語の膨大な勉強時間に費やされてしまった、私の貴重な青春時代を返してほしいのです。

## 第5の要因 「自己啓発」に甘んじている企業の無責任な放置

一方、企業は企業で、英語の重要性を叫ぶだけ叫んで、英語力の取得方法については、「自己啓発」に任せっきりです。それどころか、その費用や時間についても、完全にプライベートの問題として押しつけておいて、取得した能力は会社のために使わせています —— これを「搾取」と呼ばずして、何と呼ぼう？

そもそも、英語をプライベートで使っている人って、どれくらいいるのでしょうか。私には、「英語をプライベートで使う」という状況が想定できません。なんとか、「文通」や「メール」のやりとり程度は何とかイメージできますが、海外の掲示板への投稿、エッセイの寄稿を個人的に行っているという人の情報は、いらっしゃるのだろうと思うのですが、私には入ってきません。

私の場合、趣味で開発しているソフトウェアについて、(ちょっとだけですけど)メールで議論をしたことはあります。ですが、それだって、どちらかというと業務と無関係とは言えないような気がします。大学のESS(English Speaking Society)や、英語ディベートのサークルの人は、英語

を使ったプライベートの交流が日常なのかもしれませんが、このような特殊な例を除けば、「趣味」とか「社会、政治問題」とかで、個人的に英語で発言している人というのを聞いたことがありません（日常的にプライベートで海外の方とメールやTwitterを楽しんでいる方。インタビューさせていただきたいので、ぜひご連絡ください）。

どのような仕事であれ、必ずOJT (On the Job Training)と上司や指導員のサポートで、段階的かつ計画的に覚えていくものです。ところが私が知る限り、「英語を使った仕事」に関しては、このような体系的な教育が行われているという話を聞いたことがありません。英語取得が企業にとって必須であるなら、少なくとも毎週一日は、通常業務を完全にOFFにして、英語実習の日にするくらいの体制を組んでもよさそうなのです。



写真はイメージです

連載第3回において、就労人口全体の「4%」しか使っていないビジネス英語が、エンジニアの業界では「17%」に跳ね上り、最悪で「59%」にまで至る可能性がある試算を紹介しました。これが事実であるなら、エンジニアの業界は、「個人の努力」や「自己啓発」などという悠長なことを言っている段階ではないはず。 「TOEIC XXX点以下は海外出張を禁止する」とかいうお触れを、社内に出していることはありません。そんなルールができれば、間違いなく若いエンジニアの皆さんは「大喜び」です。

会社の幹部や管理職の方、まだ気付いていないのかもしれませんが、今の若い人たちは、「海外ではロクな目に遭わないこと」をよく分っているのです。リュックを背負って世界中を歩くことが「格好良かった」時代は、とっくの昔に終了しているのです。「いまだ見ぬ海外の地に立ちたい」などというロマンを持っている若者は絶対的少数です。

「海外赴任」には、もはや魅力はなく、そんなものを餌にして英語能力の取得を「自己啓発」に導くような方法は、もう時代遅れなのです。

——と、ここまで記載したところで、編集担当さんから、「ちょっと待った!」が入りました。大変珍しいことです。「その論旨は、飛躍しすぎていないか」という異議と、幾つかの文献を示していただきました\*1) \*2)。そこで、私の席の半径15m以内の35歳以下のエンジニア(研究員)に協力を求めて、緊急インタビューを実施してみました。結果は、下図の図2と図3の通りです。



	質問1: 海外出張は好きな方ですか?	質問2: 海外赴任(2年程度)してみたいですか
はい	<b>3.5人</b> ○異文化に触れられる ○エンジニアとして視点・観点が增える ○日本脱出に備えて(日本もギリシャのようになるかも) ○旅行が主目的(仕事は二の次) ○日本にいるより仕事ができる	<b>4人</b> ○子育て問題をクリアできれば ○経験値を高めたい ○生活インフラの問題さえクリアすれば ○英語力をスキルアップしたい ○キャリアの箔(はく)づけ
いいえ	<b>5.5人</b> ×英語がとても苦手 ×長時間フライト嫌い ×社内手続が面倒 ×家族サービスへのしわ寄せ ×出張報告が面倒 ×メシが不味い。不便だ。	<b>5人</b> ×趣味、彼女が優先 ×家族、子どもを連れていくのが難しい ×2年は長過ぎる ×秋葉原から遠くなる
	×私は「攘夷派」だ(でも会社にはナイショ→不利益になるから)	

図2 海外赴任(2年程度)の希望の有無に対するアンケート結果

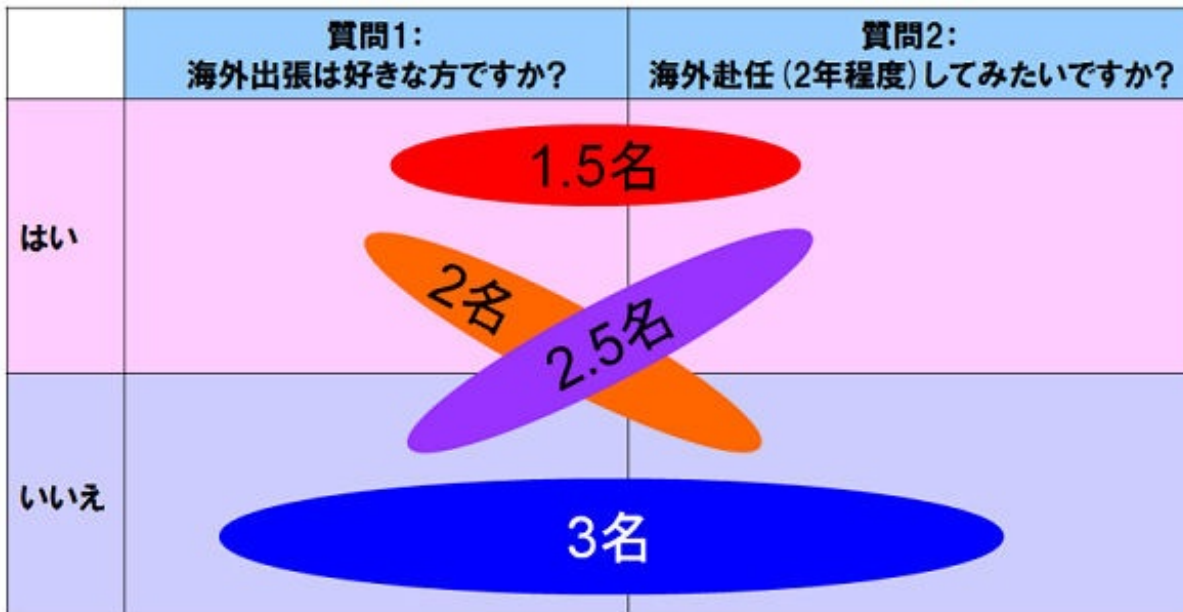


図3 若手研究員の海外指向を可視化

回答の1つにあった「秋葉原から遠くなる」を聞いた時に、「分かるよ。秋月電子通商\*3)に行けなくなるもんね」と思ったのですが……彼の場合、「メイド喫茶\*4)」の方だったのかもしれませんが。「AKB48」に続き「メイド喫茶」の国際展開も急がれます。

また「攘夷(じょうい)」とは、夷人(外国人)を実力行使で打ち払う思想を言いますが、打ち払うどころか、我々自身が海外に追いやられてしまうという現実があります。残念ですが、彼の闘いは「始まる前から終わっている」と言えましょう。

それはさておき、今回のインタビューはサンプル数が少ないですが、全体としては、「無条件に



海外に行きたい!」という勢いは小さいことが分かります。若手エンジニアに聞いて回ったのですが、「多分、若者の志向が、二極化しているのだと思いますよ」と言われました。残念ながら、この私と編集担当さんの論争は、今回では決着が生まれませんでした。今後、読者の皆さんを交えて、この議論を続けていきたいと考えております。

## エンジニアならではの行動論が別に存在

---

では、今回の連載の内容をまとめます。

結論:「英語に愛されない」ことは、私たちの責任ではない

理由:責任は、以下の5つの要因にある。

1. 英語が使われない日本という環境
2. 日本国内で英語が必要な人間の比率が小さいこと
3. 英語教育者の資質と英語教材の内容の問題
4. 「英語は度胸」という奇妙なキャッチフレーズ
5. 「自己啓発」に甘んじている企業の無責任な放置

残件:若手エンジニアの海外志向の有無(読者の皆さんを含めて議論を続行)

しかし、要因が5個あろうが100個あろうが、我々が「海外に追いやられる」という現実が消えてなくなるわけではありません。我々は、私たちの責任であろうがなかろうが、海外で闘うことを運命付けられたエンジニアです。逃げることはできません。とはいえ、これは「海外で英語を使いこなす」という意味と同じではありません。エンジニアならではの行動論は別に存在しています。

大変長らくお待たせいたしました。「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論「実践編」を、次回(第5回)より開始いたします。現段階で挙がっているキーワードを一部紹介しますと、「記号としての英語」、「ノンインタラクティブ プレゼンテーション」、「英語一図面等価変換方法」、「会議時間・内容スペクトラム拡散方式」などの文字が、私の汚い字でノートに書き殴られているのを確認することができます。どうぞ、お楽しみに。

## 脚注

---

\*1) [「内向き」「外向き」どっち? ビミョウな若者の海外志向](#) (J-CAST会社ウォッチ)

\*2) [日本人の海外留学生数は増加!若者は内向き志向にあらず](#) (東洋経済Online)

\*3) [秋月電子通商](#) (Webサイト)

\*4) [秋葉原のメイド喫茶「@homeworld」](#) (Webサイト)

---

本連載は、毎月1回公開予定です。[アイティメディアID](#)の登録会員の皆さまは、下記のリンクから

、公開時にメールでお知らせする「連載アラート」に登録できます。



## Profile

江端智一(えばたともち) [@Tomoichi\\_Ebata](#)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[江端さんのホームページ](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

## 関連リンク

[筆者の個人Webサイト「江端さんのホームページ」](#)

Copyright© 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

